

## 秋虫の声に耳傾けること

### —ミュンヘンの合気道

五十年入学 稲 賀 繁 美

虫がさわぎだしたなと感じたのは、ミュンヘンに入って、ようやく大学裏のペンションに何日かの宿は確保したものの、まだこ

日中も気温は二十度にも達せぬまま、夕刻とともに暖を取らねばカゼでもひきそうに冷える。こんなに寒くなってからビール祭りとは妙なものだ。ビールは日本の夏の暑さの中でこそ爽快なのだ。だいいちなぜ九月の祭りがオクトーヴァー・フェストなのだ。理屈に合わぬ。などおつくさ酒屋で横のおじさんと格安のビールをおおっては無駄口をたたいているうちに、何故か腹の虫がぐうと鳴った。

翌日は朝から宿探し。ビール祭りに造庭博覧会が重なって、およそ空室もなければ、まして長期貸室の値引きもない。こうなれば大学食堂のうすぐらい案内板いっぱいに落書きよろしく貼りつけてある半ば判読不能の空室情報を、目を皿にして書き写し、かたっぱしから電話してみるより他にしようがない。学生寮の類は一年前から予約が始まり、半年前には全て決まってしまうという状態。実態も知らずに飛び込んだ外国人にそうやすやすと部屋の見つかるわけもない。案の定、大学周辺で交通も至便、昼の学生街、夜の歓楽街、そのうえ雰囲気も治安も悪くないという三拍子そろったシュヴァーピングは問題外、時おり電話先の声はずんずんと思ったら、何と貸室探しの広告出した人のところに電話しているといった為体。

もう十何件もむなしく電話したころだったろうか、妙なことを電話口の相手が言いだした。  
「ワタシハ貸室ノ広告ナド出シタ憶エハナイ。」

れから二ヶ月間の寓居も見つけ得ぬまま、このバイエルンの首都を徘徊し始めて間もなくのことであった。

この夏ヨーロッパを豊った記録はずれの猛暑は、昨日まで二ヶ月を過ぎたベルリンも見のがしてはくれず、元来夏に弱い小生にも何かしら日本の夏を思いおこさせてくれるものがあり、それはそれで若々しい裸の風俗を楽しむよすがともなって、悪くはなかったのだが、そんな楽天的な感想が口をついて出てくるのも、毎日午後を、借屋の二階で、向いの日本領事館屋上のプールの涼しげな水音をにくにくしく耳にし、階下の庭にときおりお出ましになる貸主の、齒の抜けたしわくちやおばあちゃんの、どうにも無理してる派手な水着姿に嗚咽ならぬ嘔吐感を催しながらも、こちらもまわりに見えぬのを幸い糸まとわずベランダの上で日光浴できるといふ幸運につきまとわれたからに他ならない。むろんこの幸運も、タダでポタモチのように降ってきたのではなく、一軒目の貸屋で、ベルリンはフェデラティストが昔から多い場所であるという文学的・映画的記憶を実証するハメになったからこそ、貸室の仲介者が責任を感じてグーレムの一等地、森の中の準別荘地に新たに一室をあてがってくれた、という経緯なしには考えられぬ。とまれ環境が良すぎたのか、やはり暑すぎたのか、ベルリンで過ぎた盛夏二ヶ月間には、虫は動きはじめる気配さえ見せなかった。

ヨーロッパの秋は早い。まだ八月末だというのに、朝は膚寒く、

「デハ何故私ハ貴公ニ電話シタノデアラフカ。」

「ソレハ私ノ感知スルトコロデハナイ。シカシナガラ、私ハ合気道ヲ営ンデイル。貴兄ハドコカデソノ広告ヲ見タノヤモ知レナイ。」

虫の居所が昨日来悪かった理由がこの時ピンと来た。部屋捜しのことも忘れて、できる限り早く稽古に行くと、うかつにも約束してしまった電話ボックスの中の自分に、ふと気がついた。

道場主であるハインツ・パット氏がミュンヘンに来てからの日はまだ浅い。彼の道場の他に少なくともミュンヘンにはなお四ヶ所で合気道を習うことができる。ヨーロッパはどこでもそうだが、ミュンヘンにもカンフーや韓国空手の道場も進出しており、当然合気道場の門をくぐる者たちは、何か違うものを求めている。稽古は日曜の午前も含めて週六日。まだ若いながら、デュッセルドルフの浅井師範の下で最も早い昇段記録を作ってきたハインツの才能と真摯さに、人柄と熱意とに、集う門下生たちも精進をもつて応えている。助手二人はまだともに白帯だが、彼らを含め七八人は単に技のみならず、体においても心においても（修業年数はさらなり）、日本の大学卒程度の学生の比し得るところではない。（体の柔軟さと息の長さでかろうじて彼らに伍した。）遠くバンベルクやインゴルシュタットから暇を見つけてはとまりがけで稽古に来る熱心な仲間もある。柱が二本少々じゃまで、マット

がすべりやすいことを除けば、専用の広々としたうってつけの道場で、毎日思いきり技を磨きあい、週末には稽古あとに近くのしゃれた飲み屋で気のおけぬ会話深更におよんでは、ようやく見つけた田園地帯の借屋に終電で戻るという二ヶ月間の充実していたこと、言うもさらなり。原子力研究所の研究者から、日本でも勉強した画家さんまで、小ルスカよろしき赤毛赤顔の稽古の鬼から小柄で可憐な黒髪の幼稚園の先生まで、皆な鍛練の成果であろう、体の軽く、反応の敏いには感心もし、好感も持てた。

日本の師範の来欧ともなれば、遠路をいわず出張稽古にも参加するのであろう、パリでの田中先生の抜刀の話も出れば、ドイツでの稲葉先生の御講演のことを知っている者も居る。さらには小生のお世話になったことのない本部の多くの海外派遣師範諸先生の名前が、一人一人の特徴とともに、熱気をもって会話の卓につきつぎとのぼってくる。これには賛嘆を禁じ得ぬとともに、自らの不勉強を恥じた。

実際、九月末の土、日曜と、デュッセルドルフより浅井先生の見えた時は、個人の道場としてはずいぶん広い、ハインツが苦心の末に手に入れたこの百二十畳も、文字通り立錫の余地もない盛況ぶりであったが、もう滞独十六年になり、はじめてドイツに合気道を根づかせて以来、今や週末のほとんど全てをドイツ各地の出張稽古に費やして奔走されておられる浅井師範のみごとなドイツ語での御指導ぶりと、そのあと夕食の折り、そのさまざまの苦

心談、経験談に親しく接し得たのは、これまた幸運であった。

人生の休暇―と言って過言ではなからうが―のたつのは早い。浅井先生の二日間の稽古が終り、師範が空港に発たれたその秋晴れのすがすがしい日曜の昼下がりが、小生のミュンヘンとの別れの時でもあった。これだけ多くの仲間に囲まれ、満足感に包まれて旅出つことも、私の一生にもうそんなに何度もあることではないただろう。散文的なことをつけ加えるならば、外国語講座の無菌室での学習から解き放たれた、生のババリア方言とのつきあいも、そこにはあったのだ。

こう書きとめる曇天のパリの冬空の下で耳朶に甦ってくるのは、ミュンヘンで、稽古のあと、暗い深更に家路を伝う時、道を指すように行く手の畑からきこえてきた、なつかしい秋の虫達の声である。

昭和五十八年十一月十二日